

## 刊 行 に よ せ て

国際常民文化研究機構の事業も本年は5年計画の4年目を迎え、まとめと総括を考える時期となった。事業の核となる第二業務である共同研究8グループのうち、通称、田和班「漁場利用の比較研究」、伊藤班「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」、角南班「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」、泉水班「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」は本年度に『国際常民文化研究叢書』として成果報告をまとめられた。その充実した内容を一読し、初期の目標に対し限られた時間と予算の中でよくここまで達成され、また従前の調査・研究の蓄積をも惜しみなく提供されたことをこの場を借り研究代表者はじめ執筆者諸氏に謝意を表したい。最終年度の後藤班「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」、神野班「民具の名称に関する基礎的研究」、野村班「アジア祭祀芸能の比較研究」、高城班「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」の成果報告も今から心待ちされる。

以上の共同研究はもとより、漁業制度史料、アチックフィルム・写真資料をデータベース化し斯界に提供する第一業務は、順次関係資料を整理データ化し、学内における学術資産全体のデータベース公開システムの確立をも先導する役割を担うに至っている。また、日本で培われた常民文化研究の国際化をはかる第三業務も第4回国際シンポジウム「二つのミンゾク学—多文化共生のための人類文化研究—」をはじめ、望ましき共同研究の在り方をめぐる公開研究会開催を順調に開催してきた。本年報はこれら業務遂行の具体的報告と共同研究者の意欲的な論考からなる。

これらの事業がスムーズに進捗するのも、拠点である日本常民文化研究所の創設者・渋沢敬三(1896～1963)をはじめ、先輩諸氏の築き上げた調査・研究の恩恵を受けているのはむろんのこと、その人間関係のネットワークに支えられていることを陰に陽に感じるのである。本年、2013年は、渋沢敬三没後50年にあたる。普通の人々の日常の暮らしを描く資料論を中心とする渋沢敬三の学問は今まさにHistory of Everyday Life・日常史構築の具体的方法論として国際的に求められているといっても過言ではない。渋沢は、フィールドワークにおいても多角的な視点、分野の異なる研究者の目を合わせることに、共同研究の必要性を力説し、選択的な史・資料の調査を厳に戒め総合的に把握すること、何も記載されていない文書までも資料として扱うことを説いた。写真、レントゲン撮影などその時代の最新技術の動員も、後世に第一級の資料を残すことに最大の意を用いた渋沢学の表れの一つと言える。こうして、豆州内浦漁民史料、国立民族学博物館をはじめとする民具資料が残され、その利用が後世に託されているわけである。

しかし、史・資料の活用の現状を見ると、瑞穂の国、海の民と言われながら日本ではいまだに国立の農業博物館、海洋博物館は設立されていない。お隣り韓国、中国の取り組みに比べると寂しさを禁じ得ない。それにもまして、平成の市町村合併の影響のもと、歴史民俗資料館の統廃合、民具資料の廃棄など各地の同志から悲鳴に似た救援の依頼がわが日本常民文化研究所には寄せられる。先輩諸氏が苦勞して集めた民具資料が二度目の滅失の危機を迎えている。その一方、生産・生活文化を物質面から包括的に扱う民具研究は物に即するだけに今日、国際的な常民文化の比較研究において大きな可能性を秘め、期待されている。また、漁民史料には、漁場・漁期などをめぐる海民の知恵が数多く記載されており、近年の海域をめぐる紛争解決の参考に資することもできる。このよ

うに、渋沢が目指した資料学は学術的にも・実践的にもその有効性をわれわれに示している。本年は、渋沢敬三関係の催しがさまざま開催され、その意義が検討される。

現代社会は、インターネットという IT 技術の進歩もあり、即時に地域を超えて情報が伝わりとともに、大容量の記憶媒体のおかげで個々の情報の集積、その分類、体系などの分析が容易にできるようになった。資料が一部の人の占有であった時代ではなくなり、小は個人史から大は人類史まで新たなパラダイムの構築が求められている。資料と言えばこの間、半世紀以上お付き合いのある西瀬戸内海・二神島の膨大な数の写真資料、和船史研究に生涯をかけられた研究所同人・近藤友一郎さんの和船資料が一括して本研究所に収蔵されることになった。これらの資料を今後、共同研究で検討された論議も踏まえ活用することも課題となる。

事業計画の最後の一年となる本年、機構の設立の目的を、渋沢敬三没後 50 年のこの機に、この場を借りて再確認させていただいた。関係各位のラストスパートを期待するものである。

2013 年 9 月吉日

国際常民文化研究機構運営委員長  
神奈川大学日本常民文化研究所長  
佐野 賢治